HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	近江商人の出自に関する一考察
著者	黒田，重雄；Kuroda，Shigeo
引用	北海学園大学経営論集，19(2)：39-65
発行日	2021-09-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

《研究ノート》

近江商人の出自に関する一考察

黒　田　重　雄

目　次

はじめに（今，なぜ近江商人を考えるのか）
1．近江商人の里
2．近江商人による「三方よし」の概略
3．近江商人の出自はどう考えられているのか
4．古代日本の歴史における帰化人
5．日本は海民社会
6．列島と朝鮮半島の百済との関係
7．「日本人の起源」についてのDNA鑑定
8．帰化人と現代日本人との関係
おわりに（日本のビジネス，マーケティングは近江商人精神を尊ぶべきではないか）
注と参考文献

はじめに（今，なぜ近江商人を考えるのか）

現在，日本の大相撲では，モンゴル人の日本への帰化が話題になっている。今夏の東京オリンピックでも多くの国で帰化人が活躍している。これまでも，日本では，芸能関係をはじめ，政治家，実業家，経営学者などの帰化人たちがそれぞれの分野で活躍している[1]。

ところで，現代日本の経営では，「近江商人の“三方よし”」経営方策を取り入れるべし，と叫ばれている。いろいろな経営実務上の悪しき例が出るたびに，「三方よし」経営の必要性が思い起される。

その日本的経営の代表とみられている近江商人について，作家の司馬遼太郎は，「帰化人」である，と書いている[2]。

大阪から名神高速道路にさえ乗れば，のなかでT氏が，「近江人というのは，それほど損得利害に敏感なのでしょうか」と，いった。むろんT氏はごく気軽に，ごく概念でいっている。それだけに，世間の多くのひとも，近江ノ国，江州，滋賀県という地名感覚から，そのような人間風土をぼく然と感じているのであろう。

「さあ。……」と，私は頭のなかを整理しつつ考えた。

こまったことに人間風土の観察というのは，すこし視点をずらせると，まったくべつな風景が展開するのである。たとえば，日本歴史には歴史上の名士として多くの近江人（そういう名士の数の多さでは他県を圧しているであろう）が登場するが，そういう系列をみていると，どうもアキンド的体質もしくは思考法のにおいとはちょっとちがうようなのである。

それらの名前をあげる前に，商人的思考法とはなにかということを簡単に定義しておかねばならない。つまり形而下的思考法というか，右ノ品物ト左ノ品物ハドチラガドレホド大キイ，とか，ドチラガドレホド値ガタカイ，という具体的思考法の世界ということであり，商人的体質とはそういう形而下的な判断によって自分の身動きをきめる割りきった体質といっていい。

なぜそうだったのか。確かに，近江商人の

流れを汲む企業はたくさん存在している。今日の有力大企業で，今に近江商人の商原理や経営仕法の流れを汲んで，日々実践しているところは多い。

渕上清二（2008）では，西川産業，伊藤忠，丸紅，日本生命，ワコールなどが挙げられている[3]。

たとえば，伊藤忠商事は，2019 年の正月の新聞に全面広告を出して，今に近江商人の哲学「三方よし」を受け継いでいることを示している[4]。また，2018 年にも新聞の 2 面を使用した見開きいっぱいの広告を出し，160 年前の創業時から，「三方よし」の哲学で経営していることを前面に打ち出している[5]。

この点について，現伊藤忠商事代表取締役会長 CEO の岡藤正広（2021）が雑誌に一文を載せている[6]。

> 商社「3 冠」達成―。伊藤忠が 2021 年 3 月期決算で，純利益，時価総額，株価の 3 つで総合商社のトップに立ったことで，こう報じられました。僕が 1974 年に入社してから，長い間，「万年 4 位」と言われていましたから，感慨深いものがあります。
>
> 伊藤忠の 160 年の歴史は，近江商人だった創業者・伊藤忠兵衛さんの「行商」から始まっています。明治政府と組んで巨万の富を築いた財閥系とは，同じ商社といっても成り立ちからして違う。天秤棒を担いでいた忠兵衛さんが，ようやく大阪の本町に服の生地を売る店を構えたころ，三井，三菱といえば，それはすごい利益を上げていたわけです。そんな財閥系に挑み続けて，ついに 3 冠になったことを，忠兵衛さんもさぞかし喜んでいるでしょう。しかも，ウチは 5 大商社で最も従業員数が少ない。限られた人員で首位になるため，僕は 2010 年に社長に就任してからの 11 年間，「いかに生産性を上げるか」の一点に絞り手を打ってきました。

司馬がいう帰化人説が本当なら，伊藤忠商事をはじめ数多くの末裔を生んでいる近江商人はどこからやってきたのであろうか。

しかしながら，筆者としては，近江商人の出自についてはかならずしも明らかにされていないと考えている。つまり，鎌倉時代に生まれ，今に伝えられる「三方よし」を生み出した「近江商人」とはどういう人たちなのか，いかなるルーツを持った人たちなのかを知りたくなり，これまで歴史に疎い筆者が，それについての出来る限りの文献収集を試みてみたというのが本拙稿である。

1．近江商人の里

いちがいに近江商人といっても，滋賀県内のいろいろな地域に拠点を持っていた。作家の童門冬二（2012）によると，日野，近江八幡，高島，五個荘などの地域がその代表例である，と書いている[7]。

一般の案内書に従って，近江八幡を訪れてみた。近江八幡駅の前には，「近江商人発祥の地」の碑が建っている。

遠距離商人としての近江商人の出現や活躍については，筆者も検討してきている[8]。

ここで注意されるのは，近江商人の代名詞のように言われる「三方よし」（売り手よし，買い手よし，世間よし）の経営原理が何故に

近江八幡駅前にある「近江商人発祥之地」を示す碑

生まれたのかについて若干考察しておきたい。

まず，そこに，経済学者の寺西重郎（2014）が言うように鎌倉新仏教（親鸞，一遍，栄西，道元，日蓮など）の影響があったと筆者は考えている[9]。

つまり，この点について，前述の渕上は，日野商人（近江商人）の中では第一人者とされる中井源左衛門家初代良祐という人物の書いた「金持商人一枚起請文」を取り上げている。

近江商人は，全く未知の世界へ，他国（日本国内ではあったが）へ出掛けて商売するのが原則であった。行商する中で，商品についての需要と供給の状況や地域情報を速やかに入手して商活動を行うことにより，一定の販路を獲得し，全国各地に出店・枝店と呼ばれる支店を開設していく。こうして，日本の流通機構の特性である，たとえば，長い流通経路，帳合法（複式簿記）などの原型を形作っていったのである。

近江商人の場合は，フィリップ・カーティン（Philip D. Curtin）（1984）が『異文化間交易の世界史』でいうような「トレード・ディアスポラ」（trade diaspora）」（交易離散共同体）はいなかった[10]。

> ある地域の人が，事前に遠くの彼の地（未知の場所）へ渡り定住化する（交易離散共同体となる），やがて彼らを介して此の地との貿易が始まるという理論には当てはまらないものであったということである。

近江商人が「三方よし」の原理に基づいて行動していることは，作家の童門冬二（2012）が「家訓」のはじまりから解釈している[11]。

> 全体に，江戸時代の商家の家訓は，享保の時代からつくられはじめたという。享保時代というのは，八代将軍徳川吉宗が思い切った経営改革をおこなったときだ。そのときに，商人が呼応して，それぞれの「家訓」をつくったというのはおもしろい現象である。近江商人もそれぞれ家訓をつくったが，有名なのは中井家の「金持商人一枚起請文」である。中井家もほかの近江商人の例と同じように，当主は同じ名を名乗ることをならわしにしていたが，この「金持商人一枚起請文」は，初代の源左衛門良祐が，寛政四年（1792），77歳のときに稿を起こし，90歳にいたるまで何度も書き直して完成させた。原文をそのまま掲げる。

もろもろの人々沙汰し申さるゝハ，金溜る人を運のある，我は運のなき杯（など）と申（す）ハ，愚にして大なる誤りなり。運と申す事ハ候はず。金持にならんと思はゞ，酒宴遊興奢を禁じ，長寿を心掛，始末第一に，商売に励むより外に仔細は候はず。此外に貪欲（どんよく）を思はゞ先祖の憐みにはづれ，天理にもれ候べし。始末と吝（しわ）きの違あり。無智の輩ハ同事とも思ふべきか。吝（しわき）光りは消えうせぬ，始末の光明満ぬれば，十万億土を照すべし。かく心得て行ひなせる身には，五万十万の金の出来るハ疑ひなし。但（ただし）運と申事の候て，国の長者と呼るゝ事は，一代にては成がたし。二代三代もっゞいて善人の生れ出る也。それを祈候には，陰徳善事をなさんより全別儀候はず。後の子孫の奢を防（が）んため，愚老の所存を書記畢（かきしるしおわんぬ）。

文化二丑正月　　九十翁中井良祐　識（しるす）

戦国の世の中にあっても，近江商人の経営法を領国経営に取り入れる。不易の精神を守り抜く。近江商人の家訓に示される。

明治財界人で住友初代総領事であった広瀬宰平が，「我営業は確実を旨とし時勢の変遷，理財の得失を計りて之を興廃し，苟くも浮利に趨り，軽進すべからざること　自利自他公私一如」と述べたと言う。

この「自利自他公私一如」が「三方よし」

の原理につながっていることは明らかというわけである。

末永國紀（2011）は，「三方よし」の原典は，「宗次郎幼主書置」であるとしている[12]。

これを記したのは，麻布商の二代目中村治兵衛（法名　宗岸）であるが，この宗岸の書置きは，明治 23 年（1890）に発刊された井上政共の『近江商人』の中で，

> 他国へ行商スルモ総テ我事ノミト思ハズ，其国一切ノ人ヲ大切ニシテ，私利ヲ貪ルコト勿レ，神仏ノコトハ常ニ忘レザル様致スベシ

と漢文調に簡潔に要約され，さらにこの要約文をもとにして，近江商人研究者の小倉榮一郎（1962）によって，「三方よし」の表現が生み出されたとしている。

２．近江商人による「三方よし」の概略

〈近江商人の経営原理と仕法〉

近江商人には，日本における「経営学」の嚆矢といってもおかしくない経営仕法があったのである。その近江商人の行動形態や経営仕法については，渕上の『近江商人　ものしり帖』（2008 年）に詳しい[13]。要約すると，

〈薄利多売で信用を売る〉こと前提
＊資金調達方法
　共同事業（乗合商内）
＊利益の分配方法
　三つ割銀，出精金，徳用（利益，利潤）
＊先進的な会計システム
　帳合法（複式簿記の構造を持つ）
＊リスク回避の合資制度
　他人資本の導入
＊貪欲な資本増強法
〈利益は社会へ還元すべし〉
　これは，今日の企業の社会的責任（Corporate Social Responsibility：CSR）に相当するものである。
＊三方よし（自分よし・相手よし・世間よし）
＊近江商人の利益（＝ドラッカーの利益概念（後述））
〈商売のモットー〉は，
＊利益は社会に還元すべし―江戸時代に行われていた近江商人のフィランソロピー，企業の社会的責任を優先した商い―。
＊「三方よし」は CSR の源流。
＊近江商人の雇用創出事業「お助け普請。」
＊積極的に公共事業へ出資。
＊文化芸術のパトロンとしての近江商人。

などであった。

近江商人は，単に「取引」だけに専念して「製造」には関わらなかったのか，という点についても，渕上によると，近江商人も，「ものづくり」にも貢献していたことが，書かれている。それは，蚊帳の例である。

> つまり用途開発とは別に，ものづくりの戦略と販売方法の勝利であったといえましょう。

そこでまず，日本の中世期のビジネスの経営仕法の一典型を近江商人に見るという論稿を読む。

日本のビジネス・システムについて，加護野忠男・山田幸三等は，『日本のビジネスシステム―その原理と革新―』（有斐閣，2016 年）を著わし，日本企業における独自のビジネス・システムの有様を歴史的にも考察している[14]。

「はしがき」

日本企業は今，少子高齢化の急速な進行という社会構造の大きな変化とグローバルなレベルでの厳しい競争に直面しており，サスティナビリティ（持続可能性）をキーワードにした新たな価値の創造と，組織変革や人材

育成の仕組みの改革を求められている。そうした価値の創造や組織・制度の変革は，外国のモデルをそのまま移植すればうまくいくという単純な話ではない。

本書は，日本の産業社会が生みだし育んできたビジネスシステムを，日本企業の再生と成長を支えたシステム，伝統産業の長寿を支えたシステム，新しい設計思想をもった先駆的なシステム，という３つのカテゴリーの多様な事例に基づいて俯瞰し，日本のビジネスシステムの原理がどのようなものであり，その革新性はいかなるものなのかを探索的に研究した成果である。

真の企業競争力の源泉を再認識して，21 世紀を生き抜いていこうとする日本企業の戦略，グローバル化，組織変革と人材育成に寄与することが，本書のささやかな目的であり，ビジネスの最前線で課題に向き合うビジネスパーソンが，本書の議論から何らかの手がかりを得られるなら，執筆者にとってこれに勝る喜びはない。

ここでは，日本独自のビジネス・システムとして，３つのカテゴリーに分けている。

①企業の再生と成長を支えたシステム。
②伝統産業の長寿を支えたシステム。
③新しい設計思想をもった先駆的なシステム。

そして，それぞれに会社例が紹介され，細かに分析されている。

①の例にはトヨタ自動車，②の例には伊藤忠商事，③の例には積水化学工業，等々が上がっている。

②に入っている，伊藤博之（2016）の論考では，「伝統産業の長寿を支えたシステム」として，鎌倉時代に端を発する近江商人の行動形態や経営仕法について詳細に分析している[15]。

なお，伊藤忠商事など日本独自の商社の発展については，田中隆之の『総合商社―その「強さ」と，日本企業の「次」を探る―』（2017 年，祥伝社新書）における分析がある[16]。

江戸期の近江商人や伊勢商人などの活躍については，林 周二（1999）の分析がある[17]。彼らはほとんど単独（個人）の行商であったが，組織的に事業を行うものが現れた，としている。

このように近江商人は，行商する中で，商品についての需要と供給の状況や地域情報を速やかに入手して商活動を行うことにより，一定の販路を獲得し，全国各地に出店・枝店と呼ばれる支店を開設している。さらには江戸，大阪，京都という三都にも進出するほどの豪商となって活躍したとある。

現代日本においても，優秀企業といわれるところには，「三方よし」の原理が暗黙にビルト・インされていると言えるのかもしれない。

３．近江商人の出自はどう考えられているのか

前述されたように，作家の司馬遼太郎は，「近江商人は帰化人である」と書いている。実際のところはどうなのか。

近江商人を描いた代表例として，作家幸田真音の『あきんど絹屋半兵衛』という小説を読んでみた[18]。

内容紹介：

彦根で堅実な呉服商「絹屋」を営む半兵衛は，磁器に魅せられ，蓄財をなげうってやきもの作りに挑む。技術と資金の不足に苦しみながらも，妻・留津と手を取り合い，近江で京の磁器を超えると豪語する。試行錯誤の中，「湖東焼」は若き井伊直弼の心をも捉えるが，幕末の動乱が彼らの運命を呑み込んでゆく―。経済小説の名手が新しい産業への挑戦を題材に，変わりゆく時代と貨幣経済の発展を描ききった，歴史経済長篇の金字塔！

しかしながら，この本には，絹屋半兵衛の祖先についての記述をみることはできなかった。

一方，琵琶湖の東岸（湖東）へも早くから渡来人が大勢やってきていた，という文献は存在している。たとえば，インターネットを検索していると見つけられる[19]。

「日本書紀」天智8年（669年）には，百済人男女7百余人を近江国蒲生（がもう）郡に移住させた，という記載があり，愛知（えち）郡や神前（かんざき）郡も含めた湖東地域にも，当時既に百済系の豪族が住み着いていたとされている。

4，5世紀に大陸から渡来し大和政権に貢献した人々，6，7世紀，律令国家成立に寄与した漢民族たちは，大陸や半島（特に，百済）の高度な技術や知識をもたらしたとの記述もある。

その点は，商学専攻で㈶近江商人郷土館館長を務める末永國紀（2011）によって明らかにされている[20]。

近江八幡と公礼八幡神社

蒲生郡近江八幡市の宇津呂町には，このあたりで最も古い公礼（くれ）八幡神社，別名呉神社がある。祭神は，渡来人系の豪族の吉士長丹（きしのながに）である。長丹は，大化の改新直後の白雉（はくち）四年（653）に，第2回の遣唐大使として大勢の学問僧とともに唐へ渡り，翌年，百済使・新羅使を随伴して帰国している。その功によって，呉氏の姓と200戸の封戸を宇津呂町のあたりに与えられたとされている。長丹によってもたらされた，製織や医療などの進んだ文物の恩恵に浴した郷民は，長丹を神として祭祀するようになったものと思われる。現在もささやかな社殿があり，6月1日に冬の凍傷除けの神事として足洗い祭が行われている。

現在の近江八幡市，旧八日市市，安土町，蒲生町の一帯は古代から蒲生野（がもうの）と呼ばれ，この地を最初に開拓したのは，百済からの渡来人たちであった。例えば『日本書紀』によると，天智8年（669）に百済の男女700人余を蒲生野に移住させたということである。

《楽市楽座のはじまりも近江八幡》

戦国時代にこの地方を支配した領主は佐々木六角（ろっかく）氏であった。その城下の石寺には城下町経営の一環として，天文年間（1532-54）には六角定頼（さだより）によって日本で最初の楽市令が敷かれ，自由売買の市場ができていた。これは，織田信長によって天正5年（1577）6月に安土山下町中へ出された有名な楽市令の先駆を成すものである。この楽市令は，近江八幡の領主となった豊臣秀次によって天正14年に城下に発令され，保内（八日市付近）や五個荘の商人の流れをくむ人々が集住するようになった。また，土地表示を米の収穫高で表す石高制が導入されるようになった太閤検地が初めて実施されたのは，天正11年の蒲生郡得珍保（とくちんほ）（旧八日市市）の検地であった。以後，石高制は江戸時代を通じての土地制度となる。太閤検地による近江の石高は77万石であり，面積では数倍の陸奥の167万石に次ぐ全国2位であった。しかも明治初年になっても85万石余であるから，豊臣秀吉の時代からすでに近江は開発が非常に進んでいたといえる。経済政策や土地生産力からみても，早く安土桃山時代から近江は経済先進地であった。

日野の鬼室集斯と石塔寺

斉明六年（六六〇）に滅亡した百済からは，多数の人々が日本へ亡命して来た。そのなかに百済朝の高官である鬼室集斯（きしつしゅうし）がいた。先述した天智八年（六六九）に蒲生野に移住した百済大男女七〇〇人のなかに彼の名前がある。同一〇年にはその学識を買われて，令制大学寮の長官にあたるに学識頭（がくしきかみ）に任命されている。また同じように日本に帰化した一族に

は鬼室集信がいるが，やはり百済朝の高官であり，薬学に詳しい人物であった。

鬼室集斯の墓は，日野の郊外である日野町大字小野の鬼室神社境内にある。八面角柱状をしていて，外形は石造家型の祠である。

これらの蒲生野に移住した百済人が母国の様式に倣って造立したと推定されているのが，東近江市石塔町にある石塔寺三重塔である。この塔は阿育王山正寿院の背後の石段を登った山にあり，高さ七・五メートル，花崗岩で造られ，百済の故地にある長蝦里三層石塔に類似しているとされている。塔の周囲には数千の小石塔が並び，独特の雰囲気が漂っている。

そのほかの渡来人遺跡としては，階段式石室形態をもった横口式石室と呼ばれる古墳群がある。旧蒲生町の天狗前古墳群もその一つである。玄室（墓室）と羨道（通路部）の境に階段を設けて，羨道部が玄室床面より高くなっている。これらの群集墳は，七世紀前後に渡来人によって築造されたとされている。

……

《蒲生氏の台頭》

中世の石塔商人は，野々川（蒲生郡）・小幡（神崎郡）・沓掛（愛知郡）と並んで，山越四本商人団を構成し，延暦寺の庇護の下に八風峠，千草越，鮎河越あるいは鈴鹿峠を越えて北伊勢方面に行商した。伊勢の海産物ばかりでなく，東海地方の産物を取り扱い，近江や京都方面で独占販売する特権を持っていた。また，文亀二年（1502）と推定されている今堀日吉神社文書によれば，日野には日野市が立っていたことが分かる。日野市には上の市，下の市があり，一の日・七の日が市日であった（『近江日野町志』）。

戦国時代の日野は，蒲生定秀による天文2年（1533）の日野城築城以後，蒲生氏郷が天正12年（1584）に伊勢松坂へ移封するまで，城下町として発展した。定秀・賢秀・氏郷の三代の間である。

天正10年，氏郷は城下町に12カ条から成る掟書を下した。内容は，楽市を布令して売買の自由を与え，旅客の荷物の日野町発着を求め，他の間道を通ることを禁止して日野町通行を強制し，地子・加地子・伝馬を免除し，徳政令の適用外を定めている。すなわち，城下町の繁栄策を講じたのである。これによって，日野における生産活動はいっそう活発となり，日野椀・鉄砲・煙管・売薬などの産地としての素地を与えられたのである。

先の童門冬二（2012）は，蒲生氏郷について，以下のように述べている[21]。

> 信長譲りの抜群の経営感覚で，会津百万石にまで事業を拡大させることに成功した蒲生氏郷。天秤棒の行商人のように全国各地に商いの花を咲かせた氏郷は，まさに「外に出て大きくなる琵琶湖のアユ」＝近江商人の原型だ。

幕府の奨励もあって，鎌倉，室町時代には中国との僧侶の往来も盛んであったとは歴史の通説である。また特に，一般的には13世紀から16世紀にかけて朝鮮半島や中国大陸の沿岸部や一部内陸，及び東アジア諸地域において活動した〈武装商人〉とも言われた「倭寇」は，日本と大陸との交流の活発化の例として相応しいと筆者は考えている[22]。

4．古代日本の歴史における帰化人

日本人の祖先

なぜ，百済から琵琶湖の東岸へ帰化人が来ることになったのか，こうした近江商人と朝鮮半島の百済との関係を考えるためには，もう少し古代に遡って日本の歴史を知っておく必要がでてくる。

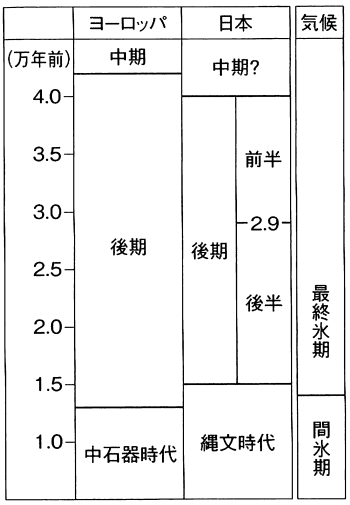
遠い昔，日本民族の祖先たちは如何なる経路をたどってこの列島に移り住んだのだろう

か。

この点については，「旧石器・縄文・弥生・古墳時代」を取り上げた松木武彦（2007）の研究が参照される[23]。

アフリカを発したヒトが，アジア大陸を横断し，あるいは海岸伝いに，日本列島にたどり着いたのはいつだろうか。可能性は二つ。ひとつは，25〜10万年前，ジャワ原人や北京原人の流れをひくアジア系の旧人が列島にまで来ていた可能性。もうひとつは，それよりのち，おそらく5万年前よりあとに，西から来たホモ・サピエンスがアジア系旧人を圧倒しながら広がり，初めて列島に達した可能性だ。

誰もが認める列島最古のヒトの存在証明は，出土した地層の検討と理化学的年代決定法によって約4万年前のものと判定されている石器である。打ち割った石の，かけら（剥片）のほうに手を加えた小型の剥片石器や，ナイフのような形に整形された石器で，動植物の加工に使った道具とみられる。旧石器時代を前期・中期・後期の3つに分けるヨーロッパの時代区分に当てはめると，後期に属する。ホモ・サピエンスの手になるものだろう。



ヨーロッパと日本の旧石器時代区分

ただし，岩手県遠野市の金取遺跡からは八万年前までさかのぼるといわれる石器も見つかっていて，それが確実だとすると，列島最古の石器は，ホモ・サピエンス到来以前にやってきていた旧人がつくった可能性が出てくる。

筆者は，これまで人は何をして生き延びてきたのか，を考えている。人は，生きて行くために何かをしてきたはずだからである。

形而上学では，人はどこからきてどこへ行くのかをかんがえる。しかし，形而下では，人は生まれたからには生きて行かねばならない。そのため，利益の付く仕事をして希望する日常生活を営んでいかねばならない。利益の付く仕事をビジネスとよぶ。何かを作ってか，何かをサービスをして，それを他人に購入してもらって初めて意味ある仕事（ビジネス）になる。人はすべからくビジネスをして生きて行くのである。つまり，互いに他人に依存して生活を営んでいる。これが，現代の「商の世界」である。

古代人も，まったく同じであったろう。日本列島に住む人々も狩猟採集生活を脱したとき，列島内はもとより外との交流・交易を行ってきたと考えられる。

外国との交易は縄文時代には顕著となる

渡来はどのように始まるのかについて，民俗学者の柳田国男（2010）が「私は是を最も簡単に，ただ宝貝の魅力のためと，一言で解説し得るように思っている」と書いている[24]。

実際に，石器時代には，すでにかなりの範囲で交易が行われていた。伊豆の神津島で産出する黒曜石（矢じりを作る原石）は，3万年前から海を越えて，すでに関東一円に流通していた[25]。

前述した松木武彦（2007）によると，縄文後期には，朝鮮半島との共通性が高くなったと述べている[26]。

水稲農耕の伝来

以上にみてきたように，西日本，とくに北部九州から瀬戸内にかけての地域では，遅くとも約4000年前の縄文時代後期中ごろには，イネおよびほかの穀物・豆類などからなる植物栽培の比重が高い生業と，簡素な什器を用いる生活が広まっていたようだ。これらの要素はいずれも，大陸，とくに朝鮮半島との共通性が高い。縄文時代後期以降に本格化した寒冷化に伴って人口の流動が激しくなったことを背景に，列島と半島の間でさかんな人の行き来が生じ，それを媒介にして，このような文化の相同化か進んだのだろう。先に述べた東日本からの人びとや文化とともに，海の向こうからの人びとや文化もまた，西日本に流れ込んだのである。

このような，東西からの人や文化の西日本への流入には，縄文時代後期から晩期までの間に何度かの波があっただろうが，そのなかでも以後の日本列島の歴史にもっとも大きな影響を与えたと考えられているのが，約2800～2700年前のこととされる，朝鮮半島南部からの水稲農耕の伝来だ。これをもって弥生時代の始まりとする研究者も少なくない。ではなぜ，何度も生じただろう人びとや文化の流入の波のうち，とくにこのときの波が，時代の画期となるほどの強いインパクトをもったと考えられているのだろうか。それを具体的にみていこう。

このときに朝鮮半島南部から渡来して日本列島に住みついた人びとのものと考えられるムラが，北部九州の玄界灘沿岸に点々と現われる。そのもっとも典型的な例とされる佐賀県唐津市茶畑遺跡では，水田の痕跡のほか，伐採用の大型で重たい磨製石斧，加工用の小型の磨製石斧，イネなどの穂摘みに使ったらしい磨製石庖丁，鋭い刃のついた磨製石剣・石鏃といった武器などがみられる。

また，菜畑遺跡では見つかっていないが，ほぼ同じ時期の福岡市那珂遺跡・江辻遺跡などでは，ムラを囲む環濠が確認されている。さらに，磨製石剣・石鏃を副葬した墓が，北部九州でもやや西寄りの地域を中心として発見される。そのなかには，墓穴の上にムラを囲む環濠が確認されている。さらに，磨製石剣・石鏃を副葬した墓が，北部九州でもやや西寄りの地域を中心として発見される。そのなかには，墓穴の上た道具や武器や施設は，いずれもそれまでに大陸から朝鮮半島南部に伝わったり，朝鮮半島南部で発達してきたりしたものだ。水田をつくる技術や，ムラに環濠を巡らせて守りを固める思考をもつ人びとが，そのための道具や武器を携えて，朝鮮半島南部から北部九州に移り住んだことは疑いない。

また，5世紀ごろには朝鮮半島との繋がりが顕著になっていると述べている[27]。

以上のような大陸や朝鮮半島とのつながりは，誰によって担われていたのか。

5．日本は海民社会

日本は，農民社会ではなく，海民社会であるという，「海からみた列島の文化史」を説くのは，中世日本史専攻の網野善彦（2017）である[28]。

> これまでしばしば「海民」という語を用いてきたが，それは海をおもな舞台として生きる人々が，漁撈はもとより，岩塩を産しない日本列島では海水からの製塩を行い，船を操るのに巧みで，海・潟・湖・川を通じて広域的な交流，物資の運搬に従事し，早くから商業活動にたずさわるなど，多様な活動を総合的に展開してきた，という事実に理由がある。
>
> これは，「漁民」の語ではとうてい表現し難い実態であり，もし「海人」を「平地人」「山人」と同じ用法で用いるならば，これも的確な用語となりうるが，「海人」はしばしば「あ

ま」と読まれることによって，限定された潜水を行う海民のみをさすと理解されやすいため，現在の歴史学界ではなお市民権をもったとはいい難い「海民」の用語をあえてここでは使用した。また，「潟の民」「湖の民」「川の民」と呼びうる人々も，もとより存在し，そこには海とはまた異なる問題のあることを十分考慮に入れなくてはならないが，いまは煩いを避けるために，あえて「海民」の語でこれらを代表させておきたい。

この言葉は，漁撈・製塩等が多少とも専業化した時期から用いることが許されよう。とすると，縄文後期から関東・東北ではじまる土器製塩はすでに交易を前提とするといわれ，渡辺誠も縄文時代から漁撈の専業化を指摘しているので，海民の語をここまで遡らせることは可能である。この時期から確認されている船による広域的交流もまた，これらの人々の担うところだったと思われる。

弥生時代に入れば躊躇なく「海民」を考えることができるし，それはむしろ必要ですらある。漁撈・製塩はもとより，中国大陸，朝鮮半島，列島の島々の間の海を通じての交流を担ったのは，間違いなく「海民」であった。そして前述したような律令国家の国制によって，一時期，規制をうけることもあったとはいえ，その活動はさらに広く展開していった。元来，漁撈・製塩は当初から交易を前提としており，日本列島における最も早い商業の担い手は塩商人，ついで魚貝商人だったと考えられるが，こうした海民の職能の分化もしだいに進んでいった。

11 世紀後半，西日本にはその主たる職能を通して天皇・神仏に奉仕・直属する供御人，神人，寄人が現れてくるが，塩商人，魚貝商人，廻船人などを主要な職能とする有力な海民も，こうした称号を与えられ，百姓と区別される立場に立った。ただ，実態に即してみると，これらの人々も，なお漁撈・製塩と未分化であり，逆に出挙（すいこ）＝金融を行う場合もあったのである。そして百姓の海民も，移動性をまだもっていたとはいえ，しだいに浦・浜・津・泊などに安定した集落を形成し，さきのような多方面での活動を活発に展開していた。

それとともに，海民を下人として従え，百姓の海民を支配する海の領主ともいうべき有力者が姿を現す。供御人・神人のなかにもいたとみられるこうした人々は，津・泊で徴収された津料・勝載料（しょうさい）などの関料＝交通税，商業・貨物税の徴収にもあたったと思われる。

船による交易には知性発展の効果があるというのは，山崎正和（2011）である[29]。

知性発展の背景―交易

そのうえ船による航海は陸上の交通に比べて，単純な情熱や体力よりも合理的な知性の働きを多く必要とする。船長は風向きや潮目を読み，季節ごとに変わる気象を知り，帆と舵の微妙な連動に注意して操船しなければならない。さらに夜間の航海のさいには天測の能力が求められ，天文についての知識と判断力が不可欠となる。船員たちも砂漠の隊商の一員に比べて仕事の専門性が高く，操舵や見張りや帆の調節など，違った作業を互いに連携しておこなわなければならない。航海はシステムを操る営みであり，少なくとも体力と同程度に知力に頼る仕事だといえる。

また航海の目的はおおむね交易であるが，他のいかなる産業に比べても商業が知的な営為であることは疑いない。それは取引と呼ばれ，利益を求める交換の営みだが，そのためにまず必要なのは感情ではなく冷静な知性だからである。旧著『社交する人間』にも引用したことだが，経済学者アルバート・ハーシュマンはこの点に関連して，十七世紀に「インタレスト」という言葉が特別の意味で多用されたことに着目している。インタレストは「関心」とも訳され，胸中でおのずから湧きあがる点で感情の一種にほかならないが，

そのなかに最初から損得計算を含んでいるという意味で独特の理性的な感情である。

ハーシュマンはマキャベリを始めとする十七世紀の知識人が，とかく熱狂的な感情に走りがちな君主たちを牽制するために，彼らの心をこのインタレストに誘導しようと努めたという。怒りや誇りや欲情が君主を戦争へと駆りたてがちなのにたいして，「利益感情」とも訳されるこの感情だけは，彼らをおのずから平和な取引に向かわせると考えられたからである。「君主は国民に命令し，利益は君主に命令する」という箴言が十七世紀前半に生まれ，あのモンテスキューも「商業は自然に人びとを平和に導く」と述べていた。

（筆者注：アダム・スミスの「見えざる手」（an invisible hand）と同じ内容を表している）

6．列島と朝鮮半島の百済との関係

列島と朝鮮半島の百済との関係については，田中史生（2009）が述べる[30]。

古代の列島社会（倭国）は，内と外が交錯しあうアジアのネットワークの舞台である。大王と異なるチャンネルで朝鮮諸国と結びつき，国内の政治を牽制する豪族たち。渡来人や留学生によって運ばれる技術・文化，そして政治的な思惑。外交と交易を独占し，中華的な国家形成を目指す日本王権と，国家の枠を飛び越え成長する国際商人の動き。

倭国の時代から，律令国家成立以後まで，歴史を動かし続けた「人の交流」を，実証的に再現し，国家間関係として描かれがちな古代日本とアジアの関係史を捉え直す。

日本古代史を専攻する 15 人で書いた，『古代史講義―邪馬台国から平安時代まで―』では，卑弥呼時代からの交易についての研究結果である[31]。

交易からみる卑弥呼時代の日本列島

戦後の考古学的な調査の増加と技術の進展により弥生時代や古墳時代の列島社会への評価は一変しつつある。特にこれまで主に研究俎上に載せられていた墳丘墓や古墳以外にも，重要な集落や物流拠点が次々と発見され，大陸―列島間，また列島諸地域間の交易ネットワークが復元できるようになり，研究も活発化している。「交易」の視点で眺めると，卑弥呼の時代の列島はどのように描けるであろうか。

古代における広域間交易の中心地の一つは，大陸と地理的距離の近しい北部九州であったことは疑いない。そこでまず卑弥呼の時代前後における北部九州での交易の実相とその変遷を，久住猛雄氏の研究に従って整理しておきたい。

朝鮮半島と九州本土の交易を結びつけていたのはその間にある対馬・壱岐（いき）等の島々であった。特に壱岐の原（はる）の辻遺跡では列島系・半島系・中国系の遺物が多数出土しており，弥生時代の多地域間交易の舞台として重要な拠点であった。特に三韓土器（半島南部の馬韓・弁韓・辰韓産の土器）は弥生時代後期以降さらに出土数が増加することから，三韓の人々が盛んに壱岐に来訪し交易を行っていたと想定される。一方で楽浪地域産の土器（楽浪土器）も原の辻遺跡でも一定程度出土するものの，主体は三雲遺跡群（福岡県糸島市）を中心とする九州本土の糸島地域であった。糸島は倭人伝の伊都国に比定する説が有力で，中国鏡を副葬する墳墓も多数所在する。つまり楽浪地域の人々が糸島地域に来訪し，糸島の支配者層につながる高いレベルでの交易や政治交渉を行ったと想定されている。こうした交易の場によって対象と階層を分離した重層的な交易構造は「原の辻＝三雲貿易」と呼ばれている。この交易体制は弥生時代中期末（紀元前一世紀）から終末期（三世紀半ば）にかけて継続する。

ところが，弥生時代終末期から古墳時代初頭（三世紀半ば～後半）にかけて糸島地域の楽浪土器の出土が減少し，代わって糸島東隣の博多湾岸やその後背地福岡平野の遺跡群で確認されるようになる。壱岐・博多湾岸・福岡平野の遺跡で出土する三韓土器は，半島西南部の馬韓系土器が主流を占めるようになる。これは楽浪・帯方郡と北部九州との交易に馬韓諸国が大きく関与し始めたことを示すとされる。この時期，糸島地域を主体とする「原の辻＝三雲貿易」が次第に規模を縮小し，博多湾岸が北部九州の一大交易地となる「博多湾貿易」が成立した。博多湾岸や福岡平野では西日本諸地域の土器も見つかっており，それらの地域の人々が大陸系文物の入手を主目的に来襲し活発な交易を行っていた。

続いて古墳時代前期前半（三世紀末～四匹紀前半）になると，博多湾岸の西新町遺跡（福岡県福岡市）に半島系土器や列島内諸地域の土器の出土が集中するようになり交易の揚が一元化されて博多湾貿易が最盛期を迎える。しかし四世紀半ば頃から西新町遺跡では半島系土器が次第に減少しやがて消滅する。同時に博多湾貿易を支えた福岡平野の大集落や，そのネットワークに組み込まれていた西日本各地の交易拠点も衰退したとされる。博多湾貿易に依存しない新たな大陸との交易体制への移行がその背景にあると考えられる。

卑弥呼の時代は「原の辻九二雲貿易」から「博多湾貿易」へと切り替わる過渡期にあたる。「原の辻九二雲貿易」と関連して，倭人伝によると伊都国には諸国の検察を任務とする「一大率」が置かれ，諸国は「之を畏憚」したという。この一大率の役割は，卑弥呼による外交の管理と糸島地域を中心とする港湾での交易秩序の維持であったと考えられている（田中 2016）。諸国が畏れるほどの権能を一大率が保持していたことで，重層的な貿易体制が維持されたのであろう。一方で卑弥呼は景初二（三）年を皮切りに三世紀半ばにかけて帯方郡を経由して魏へと積極的に遣使を行った。

卑弥呼の時代の朝鮮半島と日本列島の関連遺跡
（出所）佐藤　信編（2018）『古代史講義―邪馬台国から平安時代まで―』，p. 22。

600年代における唐による半島支配と百済の滅亡についての経緯を調べてみる[32]。

唐による半島支配と新羅による統一

唐は高句麗の都があった平壌に安東都護府を設置して朝鮮半島支配を目指し，百済の故地に熊津都督府をはじめとする5つの都督府を設置して熊津都督に全体の統轄を命じた。

……

唐の支配に反発した新羅は，建前上は唐の臣下という立ち位置を維持しつつ，「百済と新羅は共に唐の領土なのであり，そこに国境はない」という論理の下，百済・高句麗の遺民を蜂起させつつ領土を蚕食する一方で，唐へは謝罪使を派遣するという方法で支配地を広げた。唐側では繰り返される新羅の領土拡張と謝罪使に対し，新羅王の王位剥奪の問題にまで発展したのもの，西方で国力をつけた吐蕃の侵入で都長安までもが危険に曝される状態となり，遠方に位置する朝鮮半島を維持できなくなり，最終的に百済の故地は新羅の支配下に入った。

百済滅亡の後，多くの百済の高官たちが新羅に降った。660年に行われた論功行賞では佐平の忠常，常永，達率の自簡などの百済遺臣に新羅の地位が与えられている。白村江の戦い（天智2年8月（663年10月）に朝鮮半島の白村江（現在の錦江河口付近）で行われた）の後には，多数の百済人が倭国へ亡命した。百済王子豊璋の弟・善光（または禅広）の子孫は倭国の朝廷から百済王（くだらのこにきし）の姓を賜り，日本の氏族としての百済王氏を中心として倭国に根付いていった。

7．「日本人の起源」についてのDNA鑑定

「日本人の起源」についてのゲノム研究がある。『日経サイエンス』の「特集　ヤポネシア―47都道府県人のゲノムが明かす　日本人の起源―」である[33]。

ここでは，まず，「渡来人とは一体誰なのか」の定義から始まる。

「渡来人」とは一体誰なのか

●現代人のゲノムには3000年前以降の弥生時代に渡来した人々の痕跡が残っており，各都道府県に住む人々は少しずつ遺伝的特徴が異なる。

■弥生時代の人骨のゲノム解析を行うことで，大陸由来の渡来人と縄文時代からの在来人の混血は非常にゆっくりと進んだことがわかってきた。

・大陸から来た渡来人と思われた九州北部の人骨の解析は，渡来人は移動ルート上にいた人々と混血しながら日本列島へ来た可能性を示している。

・渡来人は日本に水田稲作や青銅器をもたらしたが，稲作を伝えた集団と青銅器を伝えた集団はルーツが異なる可能性がある。

渡来人とは誰なのか

渡来人はざっくりと「大陸からやってきた集団」とされることが多い。しかし実際のところ，渡来人とはどんな集団だったのだろうか。その手掛かりを得るべく，篠田らのチームは2020年，福岡県那珂川市の安徳台遺跡の人骨のゲノム解析を行った。安徳台遺跡は弥生時代中期（紀元前1世紀）の大規模な墓地遺跡で，多数の住居跡や，勾玉や鉄剣などと一緒に葬られた有力者の墓が複数見つかっている（左ページの写真）。骨の形態や墓から見つかった出土品の特徴から，出土した人物は渡来系の弥生人と考えられてきた。

しかしそのうちの1体をゲノム解析したところ，予想外の結果が得られた。渡来人と思われたこの人物のゲノムデータを他の集団と比較してみると，日本列島に暮らす現代人と

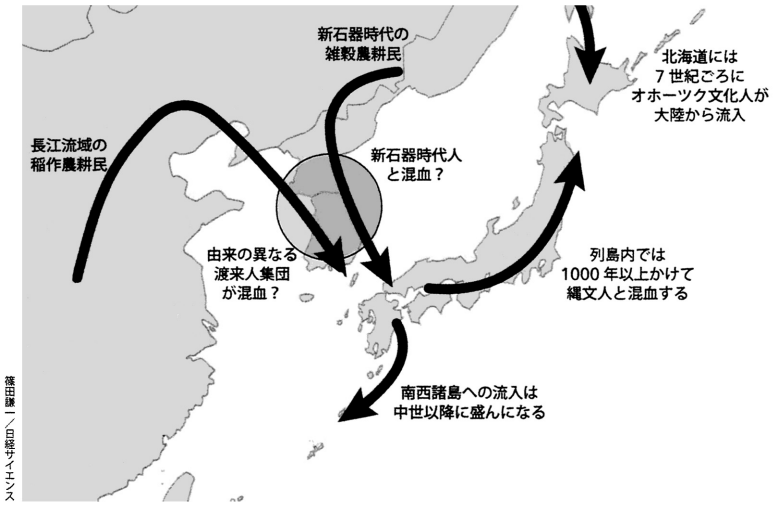
同じ特徴を持っていたのだ（上のグラフ）。単純に考えると，**日本列島に渡来する前にすでに渡来人は縄文人と混血していたことになる。**

この不思議な解析結果を理解するには，一旦時計を巻き戻して縄文時代のことを考える必要がある。この時代，東アジアの太平洋沿岸で暮らしていた集団は互いに近縁な関係にあった可能性が指摘されている（38 ページ「浮かび上がる縄文人の姿と祖先」）。日本列島の縄文人と近縁な関係にあったのが，朝鮮半島の新石器時代人だ。朝鮮半島において大陸内部からやってきた集団と新石器時代人が混血すれば，その人々のゲノムの特徴は，日本列島内で縄文人と渡来人が混血した場合と近くなる可能性が高い。

篠田らは 2019 年に韓国南部の釜山近郊にある加徳島のシャンパン遺跡で見つかった約 6300 年前の人骨 2 体のゲノムを調べ，2 体とも大陸由来の集団と新石器時代人の混血であったことを明らかにした。2 体のゲノム比率は，安徳台遺跡で見つかった 4300 年後の渡来系弥生人における縄文人と渡来人のゲノム比率にやや近かった。これらの結果から篠田は「大陸側からやってきた人々が朝鮮半島の在地の人々（新石器時代人）と混血しながら半島を諭下し，日本列島へやってきた可能性がある」とみる。

しかし日本列島に目を向けると。この仮説は大きな矛盾を抱えることになる。もし安徳台遺跡と同じゲノムを持っていた弥生前期の人々が東へ拡大したとすると，日本列島に暮らす現代人は渡来系弥生人よりもさらに縄文人由来のゲノム比率が高まるはずだ，ところが，前ページの主成分分析図を見ると現代人は渡来系弥生人である安徳台遺跡の人物と同じ位置にプロットされている。

この矛盾を解くシナリオは 2 つある。1 つは，渡来してきた人々は縄文人を追い払って日本列島内に広がったとするシナリオだ。しかし，これは愛知県の朝日遺跡と伊川津貝塚遺跡で見られたような渡来系弥生人と縄文人



想定される渡来人の移動経路　渡来人の由来は 2 カ所想定される。由来の異なる集団が混血してから渡来したのか，また朝鮮半島内で在来集団の人々と混血したのかどうかは不明で，朝鮮半島内の古代人ゲノムの解析結果が今後重要になる。

（出所）「特集　ヤポネシア― 47 都道府県人のゲノムが明かす　日本人の起源―」『日経サイエンス』，2021 年 8 月号（創刊 50 周年），p. 36。

の共存関係と食い違う。

もう1つは，日本列島にやってきた渡来系の人々の中に朝鮮半島の新石器時代人と混血していない大陸側の人々がいて，この人々と縄文人の間で混血が進んだというものだ。

つまり，中国や朝鮮半島から何十波にもなって人びとは日本列島に渡来し，何がしかの時をへると日本人に同化してしまったのだと語るのは，日本考古学専攻の森　浩一（2011）である[34]。

ところで，中国や朝鮮半島から何十波にもなって人びとは日本列島に渡来し，何がしかの時をへると日本人に同化してしまった，このことは現代の日本人からもすんなりと認められている。ところが逆に，日本列島から中国や朝鮮半島に渡航しその地の人になってしまうという図式は認めたがらない傾向をぼくは感じる。短期間の旅や留学生としての滞在は認めるのだが，これはおかしな思考法である。ぼくはそのような意識も，先はどの「倭人字磚」の重要性をうけつけない大がいたことの潜在理由だと感じている。

もう一つ，当時の人々の海外交流については，『隋書』「東夷伝百済条」に注目すべき一文がある。「其大雑有新羅，高麗，倭等亦有中国人」とあって，**六世紀ごろの百済には新羅人，高句麗人，倭人らが雑(まじ)って住んでいて，中国人もいた**のである。この描写はおそらく百済の農村部のことではなく，海岸の港町の風景だったとぼくは推定している。

ここ二十年ほどの新しい成果として，朝鮮半島の西海岸南部の全羅南道で六世紀初頭前後の前方後円墳が十数基見つかっている。それらの古墳のなかには，墳丘の裾に円筒埴輪に似た埴製品を立てたり，木製埴輪といわれる木製の立物を配した例も知られるようになってきた。

これらの前方後円墳の被葬者を一くくりにすることはむずかしいが，移住倭人とみるかそれともその地に交易の拠点をもった倭の商人とみるか，あるいは倭人を父に韓の女を母として生れた韓子(からこ)（「継体紀」）の成長した姿とみるか，いずれにしても新しい視点が必要となった。

また，日本古代史専攻の関　晃（2011）は，以下のように述べている[35]。

現代のわれわれの一人一人は，すべて千数百年前に生活していた日本人のほとんど全部の血をうけていると言ってもよいほどである。だからわれわれは，誰でも古代の帰化人たちの血を10％や20％はうけていると考えなければならない。われわれの祖先が帰化人を同化したというような言い方がよく行われるけれども，そうではなくて，帰化人はわれわれの祖先なのである。彼らのした仕事は，日本人のためにした仕事ではなくて，日本人がしたことなのである。彼らの活躍をそういう目で見ていただくことも，また筆者の希望の一つである。

再び，司馬遼太郎は，「近江商人は帰化人たちであろう」と書いている。確かに，本拙稿の一つの結論として，近江商人のルーツは，百済からの帰化人たちを中心とする人々であったことを窺わせている。

実際，列島に，縄文・弥生時代にも大量の人的交流があったことから，百済から大量の人々が近江の地にやってきて骨をうずめたことは分かっている。

しかし，すべての近江人が商人になったわけではないし，そのずっと昔から住み着いていた住民といろいろ混ざり合って近江人とか近江商人が出来上がってきたと考えた方がよいであろう。

8．帰化人と現代日本人との関係

多くの帰化人がいる日本という国において，現代では，日本人をどう考えているのか。

日本人とは何者かについては諸説あるが，文字通りの本がある。NHK 出版の『「日本人」とは何者か？』（2015 年）である[36]。

第 1 章．日本人の美意識　九鬼周造『「いき」の構造』。
第 2 章．日本人の感受性　折口信夫『死者の書』。
第 3 章．日本人の心理　河合隼雄『中空構造日本の深層』。
第 4 章．日本人の宗教観　鈴木大拙『日本的霊性』。
大拙に触れて……スティーブ・ジョブスも登場。

産経新聞紙上で最もノーベル賞に近いとされた，2017 年に有機化学で最も権威あると言われるアメリカ化学会（ACS）の「ロジャー・アダムス賞」を受けた，元日本化学会会長の山本 尚が，2020 年に一般書を出版している[37]。その「まえがき」で以下のように述べている。

「まえがき」

日本人にノーベル賞受賞が多いのはなぜ？日本食や炭素繊維などで，日本が世界を席巻できるのはなぜ？　新型コロナウイルス禍に「自粛」で戦えた本当の理由は？

こうした疑問は日本人なら，なんとなく持っている。その答えは，日本人が昔から培ってきた独特の民族性に由来すると言うと，びっくりする人がいるだろう。

日本人の民族性は内向型で，感覚型で受け止め，フィーリング型で対処すると言われている。面白いことに，このタイプを持つ民族は世界で唯一日本人だけだ。この日本人の民族性は他の国の人たちと全く違う様々な利点を生み出した。また，多くの欠点もあるが，利点も欠点も含めて日本人であり，その特徴が今日の日本を作っているのである。だから利点と欠点の両方を理解することで，日本人に有利な生き方と仕事の仕方を見つけることができる。

また，国民性の違いについても，「中国人や韓国人の民族性を知ろう」（pp. 51–53）の項で率直に考えを披露している[38]。

ユングのタイプ論から，中国人は外向型で直感・思考型と言われている。日本人とはまさに正反対である。中国人は基本的には明るく，貧困にも裕福にも柔軟に対応する。つまり，持っているものだけで楽しむことができる。しかし，外向型で物質に目が向けられているので，必然的に完全な個人主義である。

自分の個性を生かし，いつもできればトップになりたいと思っている。他人はしばしば競争相手であるので，まず人を疑うことから始める。アグレッシブである。相手を誤解してでも，有利に立とうとする。日本人のようにすぐに謝らない。謝ったら最後，こちらが悪いことになるのである。

また，外向型の特色であるが，個人主義の「私」と「公」は正反対だから，当然，公徳心は乏しい。例えば，自分の利益にならない家の外の道路は汚しても平気である。確かに外向的な民族の自宅は綺麗で家の外は汚い。

一方，内向的な民族の自宅は乱雑だが，外は綺麗である。道を 5 分歩けばどのタイプの国かがわかるのはそのためである。

また，中国人にとって政府は基本的には敵であり，内心では頼れるのは自分の血縁者だけだと思っている。家族の団結は世界一だろう。弱者には温かいが，こちらが強くなると，俄然対抗的になる。一般には自分の才能を認めてくれた人のためには，驚くほど真剣に働

く。官僚と財界が操っている日本の政治家に比べて，中国の政治家にはこうした裏の支えがなく，したがって，個人としての政治家は遥かに優秀で，筋金入りである。

これらを見ても，中国人が日本人とは真逆であることがよくわかる。こうした民族性は，もちろん個人個人で異なるが，日本人には日本人の，中国人には中国人の共通した特色が存在するのである。他国の人と接する際に私たちは，その人の民族性を十分に理解して付き合うことで，良いところを引き出し，100％自分に還元することが可能だと認識すべきである。人を非難し，否定するだけでは，お互いに大きな成果を得ることができないし，自分にとって掛け替えのない友人もできない。

日本人が内向型であるのに対して，韓国人も典型的な外向型である。また，思考型感覚型の韓国人に対して日本人は気持ち型で全く異なる。地理的には近いのに正反対と言って良い。一般に論理性一貫性を重んじる韓国人の考え方が日本人には理解できないのはそのためである。

また，韓国人も政府を信じない代わりに家族を信じる。これは中国と似ている。公共心は薄く，あまり，契約や約束に拘らないのも，日本人とは異なっている。ギリシャやハンガリーの民族と似て，「恨」の意識は非常に強い。

日本人に特徴的な無私性は中国と韓国にはほとんど見られない。内向的な日本人は単独を嫌い，集団の一員になることを好み，無私性を尊ぶ。しかも，外向型の民族の客観的規範に対する無私性でなく，内向型民族では，他者に対する無私性である。「和を以(もっ)て貴し為す」の世界を作り上げているのだ。

脳生理学者の酒井邦嘉（2008）は，『科学者という仕事―独創性はどのように生まれるか―』を書いている[39]。

独創性とは，「ひとと同じことはしない」というプリンシプル（原則）である。「ナンバーワンよりオンリーワン」という標語も基本的に向じ考えだ。ある人が現在トップの座にいるとしても，それは単なる偶然にすぎない。時代や場所，分野などが変われば，その人よりも実力を持つ人は必ず現れる。常に上には上があるものだ。だから，他人のことは気にしてもしかたがない。「自分は自分，人は人」なのだ。

和洋の違い

欧米よりも人種や民族の多様性の少ない日本の比較的均質な文化背景では，物事の考え方や価値観，そして流行までが画一化しやすくなる。さらにその結果として，同僚や上司からの評価や特に同世代の動向が気になりやすくなる。出る杭は打たれ，自分の意見をはっきり述べると集団から浮きかねない。当然の結果として，個人の独創性の芽は摘み取られる危険にさらされる。

あえて集団に群れずに独創性を発揮するのはいかに難しいことか。強い自我や「個」を持つ人は，大勢の風潮になじみにくい。このような人は，学校での集団行動や「組織」が苦手であり，変わり者として疎んじられがちである。会社に入れば，人づきあいの悪い，組織になじまない人として社内の評価も上がりにくい。こうした状況に対する危機感は，これまでくり返し指摘されてきた。

「孤独になり得る，あるいは孤独に耐え得るような状況が存在する」ことについては，恐らく全体を包み込もうとする日本の「和の精神」はなかなかそういう状況を作ってくれない。組織や集団の中に入っていないと心安まらないような社会においては，孤独になることは集団から疎外されたことと同義語になってしまう場合が多い。集団による創造性開発の場合はいざ知らず，革新的な原理の発明・発見は個人的になされるケースのほうがむしろ原則的である。このためにはしばしば孤独になって，自己の内的要求に耳を傾ける

ことが必要であろう*。

＊乾侑『日本人と創造性―科学技術立国実現のために』共立出版（1982）。

また，アメリカ人社会科学者による日本の科学者像を取材したレポートもあり，「日本人は特別なのか？」という問いは文化人類学的にも興味深いテーマである。「和の精神」は，基本的に上から下へと向かい（これをトップダウンという），伝統的に「お上」の意向をそのまま受け止めることになろう。自分の考えや主張をおさえ，自分を包み込む集団にあわせてうまくまざることが，文字通り「和」なのであり，学校でも会社でも組織に調和して行動することが求められる。

これに対し，西洋の精神は基本的に自己から外へ向いており，下から上の階層へと向かう（これをボトムアップという）。西洋では，一般に自分のはっきりした考えや主張を持つことが良しとされ，幼少からそのように教育される。このような和洋の違いは，心の持ち方今考え方だけでなく，日常生活の形式的なことにまで及んでいる。たとえば年月日は，欧米で日／月／年または月／日／年の順で書かれるし，手紙の宛先は受取人の名前から始まって番地，町・市，郡・州，国の順に書かれ，日本の習慣とちょうど逆になっている。さらに日本語では，兄弟・姉妹の区別や敬語の使い方のように，人間同士の上下関係がその構造にまで組みこまれている。

近代科学が西洋で生まれ，そして欧米の個人主義のもとに発展してきたことは歴史的事実である。江戸時代の和算や，からくり人形のような日本独自の科学技術もまた，個人の創造力が開花したものであり，集団の営みによる産物ではなかった。現代の研究者は，どの程度まで自分の力を意識しているだろうか。たとえば，暗黙のうちに集団に同化しながら科学研究を行おうとしたり，研究室は基本的に先輩が後輩のめんどうをみてくれるものだと思いこむならば，いずれストレスという形で表面化してくるだろう。自分の研究分野でどのような視点から自らの独創性を発揮できそうか，はっきりとした決意や自負がなければ，大きな研究集団であればあるほど過激になる研究者間の競争に巻き込まれて，自分を見失うことになる危険性が高い。そして，ただ上からの指示を待つだけでは，独創性は決して生まれない。

すでに D. リースマンらが指摘したように，西洋の精神も一貫して心の内にジャイロスコープ（羅針盤）を持ち続けてきたわけではない。現代人は，常に他人やメディアに敏感に反応するようなレーダーを内に抱えた，「他人指向型」の性格に変わっているかもしれないのだ。この傾向は，携帯電話や電子メールの着信を四六時中気にするような昨今になって，一層強まったと言えるだろう。

研究者として「独創性」こそが最も大切だと考えるならば，どの国にいようと，いつの時代に生きようともただ一つ変わらない鉄則がある。それは他人に左右されず，決して群れないことである。

百済人の気質とは

百済人は，どんな人々だったのであろうか。インターネットで調べる[40]。当時の朝鮮半島には漢人，扶余人，倭人，ツングース系ワイバク族が住んでおり，百済人は現在の朝鮮人とは違うとし，白村江の戦いで百済滅亡後，数万人規模の百済人が日本の関東地方へも亡命をした，としている。

また，別のネットもみる（2021 年 7 月 12 日閲覧）と，「百済人≡韓国人ではありません」というのとか，むしろ大陸人（中国人）と近い，というのも散見された。。

商人としての気質についてはどうか

百済人の商人としての気質については，分からなかったが，中国人はどうであろうか。

東洋史家の宮崎市定（2006）は，中国人の商人気質について書いている[41]。

中国史の研究者の間では，中国の資本主義がいっから起こったかということが，目下人きな問題になっている。私の考えでは中国ではすでに今から千年も前の宋代から，一種の資本主義が成立していた。中国商人の商売のうまさは世に定評があるが，それは単にがめっいぽかりではない。中国商人はそんな大昔にすでに封建制度を払いのけて，世の中は半ば商人の天下になっていたので，以後の長卜歴史の間に，一種の商人道徳，一種の商人社会のルールを確立した。そして一度こういうルールが成立すると，たとえば民国初年のような混乱期においてさえも，それがそのまま守り続けられていた。ルールが成立するということは，そのルールを守っていた方が結局は勝つという自信の成立である。つまりルールに従うことが最上の戦術であり，行き当りばったりの戦術は効果，がなくなることを意味する。

日本はまだそこまで行かない。たとえば夜店で植木をひやかしそこなったら，絶対もう買えない。欲しそうな顔をして足許を見られたらおしまいである。どんな法外な吹っかけ値段でも，時の利を得た商人はもうそれから一文も負けずに頑張りとおすだろう。

ところが中国人の商法は少しちがうのである。昭和八年の頃だったと思う。北京に一月ほど滞在したことがあった。友人に誘われて東安市場を歩きまわり，その中の骨董屋て端溪の硯を見つけてそれが欲しくなった。友人を通訳にして値段を交渉したが，ある所までくると，もうそれからは何といっても負けない。すると友人が，もう一度明日来て交渉しようと言う。どうも腑に落ちないが，ものはためしと，その言葉に従って，翌日出て行くと，果してこちらの言い値に負けてくれた。

ここが中国の商人気質の日本と違う点てある。

筆者は，かつてフランスのパリ郊外にあるノミの市，クリニャンクールで同じことを経験した。古いペーパーナイフを見つけたので，値札より負けてくれ，と言うと，負けないという。そこで一回りしてそこを通ると，負けるので買っていけ，と言う。これなどは，中国仕込みかと思う。

したがって，仮に，百済人も大陸の血が混ざっているとするなら，商人としての資質も備えていると感じさせるものが確かにある。

未知の国にやってきて，仏教国である日本の地域に合った商売を始めたということだろう。

なお，今日の経営で重視されるのは，取引当事者双方の Win-Win の関係であるが，近江商人でいえば，取引当事者だけでなく社会的にもよしとするべく，Win-Win-Win の関係重視ということになるであろう。

おわりに
（日本のビジネス，マーケティングは近江商人精神を尊ぶべきではないか）

「富山の薬売り」も近江商人の流れという説がある。戦後の昭和 20 年代の半ばくらいまで，富山の薬売りのおじさん（子供にはそう見えた）が，北海道札幌のはずれ厚別（当時は，札幌郡白石村字厚別という地名の農村で，各家も散在していた）にあるわが家に薬箱を置いて一年に一度やってきて薬を交換していった。当時の厚別には，雑貨屋さんが遠くの町に 1， 2 軒ある程度で必需品の調達はかなりの部分行商に頼っていた。当時は，小樽からの魚売りのおじさんも数人リヤカーを引いて農家を一軒一軒回って売り歩いていた。早々と売れてしまったときなど，留守番の小生と将棋を数局指してから帰って行く人もいた。

薬売りのおじさんは，厚別駅前の旅館に数日泊まって地域に散在する家をくまなく回っていたらしい。わが家は農家をしており，父

母は朝早くから暗くなるまで田畑で働いていて，留守番の筆者はまだ小学生の頃であったが，昼食時にいったん帰宅する母に対応するべく訪問している。こうして薬の販売というものは行商人が行うものだと思っていた。

富山の薬売りのおじさんは，子どもの目からみても大変律儀そうな人で，身成もきちんとしており，大きなかごを担いで一年に一度かならずやってくる人の印象であった。帰りには，小生に紙風船もくれたのを覚えている。

今では，とても想像できない情景である（現在，厚別は人口 12 万人を超える近代的な街に生まれ変わっている。当然，高層アパートは林立し，数多くの百貨店，チェーン・ストア，スーパーマーケット，コンビニなど多彩な店舗群を擁し，また高齢社会に相応しい，かつての御用聞きを彷彿する生協のトドックも活動するという商環境は十分過ぎるほど整えられている）。

ここで，筆者も想像をめぐらしてみたい。

仮に，百済人が近江商人になったとした場合，百済人は未知の土地に移住して，さて何をして生きて行こうかを考えたとき，商売をすることだったということではないか。それも誠実に客対応する商人になることだったのではないか。そうしてそれぞれの地で骨を埋める決心したのではないか。他の帰化人たちもすべからくそう考えていたのではないか。

従来から居住していた人々との協力があって，ある意味一致協力して商売をしていったことが想定できる。胡散臭い人々との噂が立った場合，商売にはならなかったはずである。それが次第に「家訓」や「金持商人一枚起請文」に高められていったということではないか。

とにかく，そういう状況にありながら，「流通」や「マーケティング」という言葉が生まれていなかったというに過ぎない。

つまり，中世期において，誰が，どういう商品を開発し，どういう販売方法を工夫して実行に移していたかの研究が少なかったというだけではないのかと考えざるを得ない。

それにはそれなりの理由もある。17 世紀，江戸時代に入って「士農工商」の身分制度が確立し，商人が最下層に置かれた（現在では，この制度の記述は一般の教科書にはないが）。こうした政治的状況や政策が商人たちの闊達な行動を学問にまだ高めるという経緯を阻害した最大の原因と考えられるのである。

一方では，商人は，「他人の褌（ふんどし）で商売をしている卑しい人間だ」という風潮を作り出していたこともある。その良い例が幕末期には天保の改革を行った水野忠邦（将軍は 12 代・家慶）の「徳政令」（借金帳消し令）がある。

やっと，18 世紀の半ばになって，石田梅岩の『問鄙問答』（1739 年）によって町人・商人の利益が他の職業のそれと寸分の違いもないことが説かれる（これが「石門心学」とされるもの）有様であった[42]。

この書は，アダム・スミスの『国富論』より 40 年も前である。当時は「石門心学」は全国各地の私塾でも教えられていたという文献もあるが，江戸の大店の従業員の研修用としても活用されていたらしい。町人の商売意識を高めるためだったという[43]。

明治期に入っても，「文明開化」，「殖産興業」では，産業政策が中心で，個々の企業のあるべき姿を研究する「流通やマーケティング」には日が当たってきていない。

戦後の昭和 30 年（1955 年）にアメリカ視察団が帰国して，「アメリカではマーケティングというものをやって企業を成功に導いている。日本も見習う必要がある」と言ったところから一般に広がった。

しかして，マーケティングは 20 世紀半ば日本に入ってきたことになっている。これは，文明開化で西洋のものを積極的に取り入れようという気持ちの表れということもできるかもしれない。

しかしたとえば，1990 年代にアメリカで始

まったとされる「統合的マーケティング・コミュニケーション論」（IMC）などは，200年も前の江戸期の「花魁」の宣伝と寸分違いがないという説もある。

要するに状況の表現の仕方の問題，捉え方の相違という認識が研究者にも説明不足があったということかもしれない。この点，日本の広告や流通に従事している経営史専攻の鳥羽欽一郎教授の時代を遡った研究業績をもっと参照すべきではないかと考えている。ほかにもアメリカ流マーケティングは，古くから日本にあったと言っても不思議ではないようなものが数多く存在しているようなのである。

近江商人の商原理とドラッカーの利益概念との関係

ビジネスを実践するに当たって最も重要なことは「人」（人材と言い換えても同じ）である。マーケティングを学問にする場合でも，独自の概念が検討されねばならない。特に，人間概念は重要と考えられる。従来は経済学の借り物であった「企業と消費者とに分ける二分法」概念ではなく，独自の概念，たとえば，「統合的人間」概念が採用されねばならないと筆者は述べてきている。

歴史を遡っているうちに，近江商人の「三方よし」の原理は，ドラッカーの“*Management*”の考え方に酷似していると考えるようになっている[44]。

「三方」の一つ「世間よし」ということが，ドラッカーの「利益」概念である「社会的に許容される範囲での利益」と同じものと思われるからである。

マーケティングを「自己のビジネスを探索し実行すること」と解すならば，それは日本でも室町時代を中心とする中世期まで遡ることができると筆者は考えている。

メソポタミヤの商人たちの活動が，やがて人類にとって最大の発明とされる「ビジネス・システム」を生み出すきっかけであったが，このときの社会は慣習社会であった。封建社会でも，資本主義社会でも，共産主義社会でもなかった。しかし，その後に現れるそれらのいかなる社会経済制度においてもビジネスは生き残ってきた。為政者たちは，その存在を巧妙に存分に生かしもした。

とにかく，ビジネスは，これからどんな社会が形成されようとも生き続けると考えられるのである。

ノーベル経済学賞を受賞した理論経済学者のJ. R.ヒックスも「歴史」を書いて「商人」の重要性を強調している[45]。それよりこちらの業績でノーベル賞をもらいたかったと述懐している。しかし，このことは経済学の分野では無視し続けているように見える。

以上のことを，多くのビジネスマンを送り出してきたハーバード・ビジネススクール（HBS）の教授たちが指摘し出したということではないかと考える所以である[46]。

そこでは，混乱した状況の中で，如何にビジネスは立ち向かって行くかの原理・原則，ないし方策について語られている。

そのため，まず第一の原理・原則については，倫理基準（morality）が重要であることを指摘している。米国においては，ともすれば，科学やビジネスには，宗教心がある場合は別として，倫理や道徳といったことを避けて通ることが当たり前のようになっていた。教授たちは，世界の先頭に立ってビジネスを展開していくに当たって，そこにこれまでの最大の欠陥を見出したということである。

また，当然のことながら，ビジネスには他の人々のことを第一に考えねばならないという要素があることを改めて知らしめたということでもある。

こうして教授たちは，人間概念において，経済学における二分法やその他の範疇を抜け出さねばならないことも指摘している。

何も分からない未来に向かって船出するビジネスは,「誠心誠意で正直に」で事に当たらねばならない。そのことが，結局は自己の利益と社会的利益の両方に益することになるとしている。

考えてみれば，このことは日本の室町時代にその源を辿ることができるものである。近江商人の「三方よし（われよし，相手よし，世の中よし）の原則」そのものである。

日本人（研究者も含めて）は，これまで，これが「ビジネスの原理」であり,「マーケティングの原理」であることを忘れがちであったといえよう。

仮に，この原則が HBS の教授たちの指摘に当てはまるとすると，米国は，400 年は遅れていることになる。逆に日本人は 400 年ぶりに教えられたと言っても過言ではない[47]。

ただ，西洋文化の取入れに汲々としてきた結果と言われてもあながち間違いではないであろう。

注と参考文献：

（1）日本に帰化した人物（ウイキペディア）（2021 年 8 月 2 日閲覧）：

芸能関係では，俳優の松田優作，岩城滉一，歌手の錦野　旦（にしきのあきら），和田アキ子，都はるみ，小説家の小泉八雲，C.W. ニコル，伊集院　静，ドナルド・キーン，陳舜臣，政治家の蓮舫，実業家の孫正義，経営学者のジェイムズ・アベグレンなどが挙がっている。

（2）司馬遼太郎（2010）「近江商人を創った血の秘密」『歴史を紀行する』，文春文庫，pp. 60-61。

さわやかな近江の武将たち

ところがいま思いつくままに戦国期以後の近江人の名前をここにならべると，ずいぶんちがう風土をおもわせる。浅井長政がいる。戦国期，北近江で，ざっと三十万石程度の領域をもっていた浅井氏の若い当主であり，織田信長の結婚政略の相手にされた。信長は岐阜から出て京都をおさえようとしたが，途中の回廊として近江がある。この浅井氏と通婚することによってその通路の安全を得ようとし，妹の，高名なお市御料人を長政の嫁にしたのだが，その後，信長が越前の老大国である朝倉氏を攻めることによって情勢が一変した。浅井氏は朝倉氏とふるくから友誼関係でむすばれており，この矛盾に悩んだ。新興の織田勢力の姻戚でありつづけることはきわめて安全度が高く，功利性から考えればそのほうがいいのだが,「朝倉氏からうけた旧来の恩をうらぎることはできない」として織田氏と断交し，一数年にわたって織田軍と戦い，ついにほろんだ。長政のそういう気節の高さは，江戸時代の歴史家たちからも好意をもたれている。

気節という点からいえば，豊臣大名のなかでは生っ粋の近江人である蒲生氏郷をその代表的人物とすべきであろう。氏郷は，日野の出身である。さらに，石田三成がいる。三成は豊臣期の政治家としてはめずらしいタイプに属する。なにが正義であるかということを考える観念がきわめてつよく（まるで江戸時代の教養人のように）規律好きであり，その規律好きはむしろ病的なほどで，それをひとにも押しつけ，不正があると検断者のような態度で糾弾し，同僚から極端にきらわれた。かれの政敵であった浅野幸長なども，三成の死後,「かれが死んでから，大名たちの殿中での行儀がわるくなった」という意味のことをいっているが，とにかく，利害で離合集散する豊臣期の時代精神のなかにあって，正義とか規律とか遵法とかという，いわば形而上的なものに緊張し昂奮する観念主義者がいたということ自体，きわだったことであるとおもわれる。

ついでながら，関ケ原の前夜，旧豊臣系の，とくに尾張出身者の諸将のほとんどは家康方の勝利を見こし，家康に加担した。三成と同僚であった敦賀の城主大谷刑部少輔吉継（吉隆）はそういう判断力のきわめてするどい人物とされていたが，三成に乞われ，負けを見こして西軍に加担した。友情だけが動機であったことはあきらかであり，かつ，友情という，この明治以後に輸入された西欧くさい道徳が，明治以前の日本史において登場する数少ない実例としてかれの名は記憶されねばならない。

（3）渕上清二（2008）『近江商人ものしり帖〈改訂版〉』，（NPO 法人三方よし研究所），サンライズ出版株式会社。

（4）「伊藤忠商事株式会社の新聞全面広告」『日本経済新聞』，2016 年 1 月 4 日，14 面。

（5）『日本経済新聞』，2018 年 12 月 3 日，18・19 面。

（6）岡藤正広（2021）「伊藤忠はこうして財閥に勝った」『文藝春秋』，2021 年 9 月特別号，pp. 156-165。

（7）童門冬二（2012）『近江商人のビジネス哲学』，サンライズ出版，p. 22。

（8）黒田重雄（2015）「日本におけるマーケティングの源流に関する一考察　―近江商人の経営原理とドラッカーの“*Management*”との関係にも言及―」『北海学園大学経営学部　経営論集』，第 12 巻

第 4 号（2015 年 3 月），pp. 59-83。
（9）寺西重郎（2014）『経済行動と宗教―日本経済システムの誕生―』，勁草書房。
（10）Curtin, Philip D.（1984）, *Cross-Cultural Trade in World History*, Cambridge University Press.（フィリップ・カーティン（2002）『異文化間交易の世界史』（田村愛理・中堂幸政・山影　進訳），NTT 出版。
（11）童門冬二（2012）『前掲書』，pp. 132-133。
（12）末永國紀（2011）『近江商人　三方よし経営に学ぶ』，ミネルヴァ書房，pp. 22-23。
（13）渕上清二（2008）『前掲書』。
（14）加護野忠男・山田幸三編（2016）『日本のビジネスシステム―その原理と革新―』，有斐閣。
（15）伊藤博之（2016）「取引制度の中核―総合商社・伊藤忠商事の誕生―」『日本のビジネスシステム―その原理と革新―』（加護野忠男・山田幸三編），第 4 章所収，有斐閣，pp. 78-100。
（16）田中隆之（2017）『総合商社―その「強さ」と，日本企業の「次」を探る―』，祥伝社新書。
（17）林 周二（1999）『現代の商学』，有斐閣，pp. 122-124。

江戸期商人の諸形態

この期の商人は，上述のようにさまざまな業態のものが現われたが，これらを企業形態としてみた場合，その大部分のものは個人企業のそれで，何らかの共同結社形態をとる商人はごく萌芽的に見られるにとどまった。共同企業型のものとしては，匿名組合型のものと聞かれた会社型のものとがあり，後者の例としては三井組・小野組などがある。これは一家一門の共同企業で，いわば合資会社的なものであった。

……

なお鎖国令以前のことだが，ご朱印船などによる貿易商人たちの間には，有限責任型の冒険貸借的な出資で営まれる商人活動体が見られた。すなわち船舶遭難などの場合は元利返済の義務はないという約束で，これを拠銀（なげがね）と呼んだ。博多の貿易商，島井宗室などはこの種の投資で産をなした貿易商人であった。出資の利率は高く 50％以上にも及んだという。

このような方式の資本調達による商活動は，国内の廻船活動にも見ることができた。これは船問屋などが両替金融商人らから出資を受けて行うものであった。ただ中世の欧州の場合もそうであったが，航路一回限りのもので，永続型の事業にはなっていなかった。

江戸期商人の一典型として近江商人の企業形態について叙べておきたい。

その呼称はむろんその生国に負うが，同時にその独特な商法や経営法を指した言葉としても使われる。彼らの出身地は，近江のうちでも琵琶湖の東南部に集中しており，この一帯は京都にも隣接するとともに，北陸・東山・東海の三街道の入口を扼（やく）していたこともあり，他方では良田が少なく，農業よりも行商を方便とする風土が自然裡に芽生えたと見られる。彼らは鎌倉期から立ち現われ室町期にはすでに広く諸国へ商圏を固めていた。うち“保内商人”と呼ばれる人たちは牛馬を使って山越え行商をなし，強固な座を寄りどころに京都と伊勢地方を結ぶ，キャラバン活動をした。また“八幡商人”と称され，海外貿易に乗り出すグループも出た。彼らは徳川の鎖国令で海外雄飛の途を閉ざされるまでは，はるか遠く安南地方辺りまで商圏を拡げて活動した。鎖国後は，環境変化に屈せず京・大坂を舞台に活躍し，大商人に育っていった。さらに“日野商人”と言われる人たちは，関東・東北に定着し，北海道から千島まで進出して活躍した。うち中井家のように大名貸しで産をなす者もあり，醸造業で成功したりもした。近江商人のなかには，このように単に商業資本型の流通商人的営利に飽きたらず，マニファクチュア型産業商人へと変身した人たちも少なくない。

近江商人の商法の特色は，江州の“本家”のほかに，進出さきの諸国内へ“出店”を出し，そこを基地としてさらに次の商圏を拡げるやり方を採ったことである。“出店”は独立採算制を採らせ，丁稚方式で育てた有能な手代や番頭をしてその経営に当らせた。このやり方は危険分散に役立つとともに，奉公人たちには“別家”を持たせることで励みにもしたのである。会計帳簿なども極めて進歩した形式のものを整えていた。彼らは情報網を広く張るなどして営業面で商機を捕えるに巧みであったとともに，私生活面では質素正直をむねとし，利潤だけを追うことを強く戒めた。極めて商理に適った家訓を残すことにより，商人としての信用を築くことに意を用いた。

中世から近世へかけて全国の山間僻地まで分け入って流通活動に従事した近江商人の活躍は，全国の流通経済を促進させ，保守退嬰的な農民消費者たちに生活向上心（つまり労働心）を起させるのに大きく役立つた。

近江商人と並んで，中世から近世にかけ三都で活躍したものに伊勢商人があった。彼らはもと東国にある伊勢大神宮領などからの年貢物の運送集散に携わることがあり，それが流通経済や航路開発の仕事へ参入する切っ掛けになったと言われている。松坂木綿を扱うことで，彼らのうちには呉服商になる者が多かった。

今日の三越の前身である，1673 年に創立の越後屋呉服庖は，松坂の商人・三井高利（1622-94）の個人的創業に関わるもので，“店頭売り，現銀掛値なし”を謳い，当時一般の商法であった後払いや値引きを排した新商法で客を集めることに成功した話は有名である。なお越後屋という屋号は高利の祖父が越後守を名乗っていたことによる。三井は呉服商からさらに両替商＝金融業にも発展し，幕末多事のときは幕府へ御用金を献じている。伊勢商人は仲間の結束が固く，始末すなわち倹約第一を心掛けるなど，商人としての生き方は基本

的には近代商人のそれと似ていた。

一代で豪商となり，一代で没落した江戸商人の典型として元禄期に活躍した紀州の人，紀伊国屋文左衛門（？-1734）の名は人情本や歌舞伎の主人公としても余りにも有名である。彼は幕府の材木御用商人として産をなし，政商として銅山事業などへも関心を示した。没落したのは元禄のインフレ政策から，正徳へのデフレ政策への転換を乗切りそこねたためと言われている。彼の蜜相船買出しの話は，俗伝によるものらしい。

（18）幸田真音（2009）『あきんど―絹屋半兵衛―』（上）（下），文春文庫。
（19） Yagiken：（http://yagiken.cocolog-nifty.com/yagiken_web_site/2005/12/post_44bf.html）（2021 年 7 月 25 日閲覧）
（20） 末永國紀（2011）『前掲書』，pp. 94-100。
（21） 童門冬二（2012）「戦国武将への影響―蒲生氏郷の例―」『前掲書』，p. 105。
（22） 田中健夫（2012）『倭寇―海の歴史』，講談社学術文庫。
（23） 松木武彦（2007）『列島創世記―旧石器・縄文・弥生・古墳時代―』（日本の歴史（一），小学館，pp. 32-33。
（24） 柳田国男（2010）『海上の道』，（1978 年初版），岩波文庫，pp. 43-51。

大づかみな見越しを試みるならば，舟はもと内地の小さな白水の上で，発明せられたものであったとしても，是が大陸の沿海地方にまで，移し用いられるようになるのは容易でありまた自然である。ただあの茫洋たる青海原に突き進み，ことに一点の目標もない水平線を越えて行こうとするには，ちょうど殻近代の航空も同じように長期の経験と準備と，また失敗とを重ねすげならなかったのは当然であろう。帆というものの考案も，早く始まっていたことは疑われないが，その構造と操作の方法が，完備したのは近世のことであった。四面海に囲まれた日本のような国ですらも，まだ老翁の記憶の境まで，その利用は単純を極めており，前代文献の書き伝えたかぎりでは，舟はただ磯づたいに漕ぎめぐり，たまたま二つの海角の間を直航するときだけは，マギルと称して帆を用いたが，是は素よりその日の風次第であった。

……

もしも漂着をもって最初の交通と見ることが許されるならば，日本人の故郷はそう遠方でなかったことが先ずわかる。人は際限もなく鶴子の実のように，海上にただようては居られないのみならず，幸いに命活きて，この島住打に足るという印象を得たとすれば，一度は引き返して必要なる物種をととのえ，ことに妻娘を伴のうて，永続の計をたてねばならぬ。そういう企画の可能なる場合は限られており，したがってまたその条件の具わった海辺を，見つけることもさほど困難ではない。動力航行の時代に生まれた者が，最も見落しやすい一事は，昔の船人の心長さ，種播く農夫の秋の稔りを待つよりもなお久しく，年に一度の往復を普通としていたことである。

是が習性となったと見るのは気の毒だが，近世の鳥島漂流談などにも，三組の難船者が協力して島を脱出するのに，その中の最故参は二十年以上も忍耐して，機会を待っていたという例がある。僅かな食物を見つける以外に，何一つ身を労することもなく，ただ一心に風と潮合いとの便宜を観察して，時節の到来を狙っていたという根気のよさは，おそらくは東洋の魯敏保の特性であって，距離がもっと近く船の修理に堪えるものがもしあったら，無論それよりももっと早く，故郷の浜に還ることも不可能ではなかっだろう。

そこでいよいよ私の問題の中心，どうしてそのような危険と不安との多かった一つの島に，もう一度辛苦して家族朋友を誘うてまで，渡ってくることになったのかということになるのだが，私は是を最も簡単に，ただ宝貝の魅力のためと，一言で解説し得るように思っている。

（25）藤田英夫（2003）『物流理論が縄文の常識を覆す―遮光器土偶はインド文明の遺物―』，東洋出版，p. 20。
（26）松木武彦（2007）『前掲書』，pp. 164-165
（27）松木武彦（2007）『前掲書』，pp. 325-326。

朝鮮半島文化の流入

朝鮮半島から持ち込まれた土器が，九州から近畿までの西日本を中心に，5 世紀頃から目立つようになることだ。列島内の相互交流よりも，むしろ朝鮮半島との交流のほうが密になった状況がかがえる。

さらに，近畿を中心に，壁柱建物（溝を掘って柱を立て並べ，それらを支柱として埋め込んだ壁で屋根の重みを支える建物），オンドル・かまど・土製の煙突管など，朝鮮半島に由来する住まいや暮らしの設備が現われ，それらが集中する地域も出てくる。朝鮮半島から日本列島に移り住んだ人が，5 世紀頃には増えた様子がうかがえる。

ちょうどこのころ，斜面にしつらえた登り窯で堅く焼き締めた陶器（須恵器）の生産が日本列島でも始まる。朝鮮半島からの人びとがその技術を伝えたことは疑いない。そのほか，より高度な鉄器製作，馬の飼育，および物的証拠は残りにくいけれども文字に関する知識など，5 世紀に始まったさまざまな新技術のほとんどすべては，朝鮮半島からの人びとがもたらしたものである。

もとより，それに先立つ縄文時代には大陸と朝鮮半島との繋がりはあったことは疑いない。

（28）網野善彦（2017）『日本社会再考―海からみた

列島文化―』，ちくま学芸文庫，pp. 54-55。
(29) 山崎正和（2011）『世界文明史の試み―神話と舞踊―』，中央公論新社，pp. 225-229。
(30) 田中史生（2009）『越境の古代史：倭と日本をめぐるアジアンネットワーク』，筑摩書房。
(31) 佐藤　信編（2018）『古代史講義―邪馬台国から平安時代まで―』，ちくま新書，pp. 20-24。
(32)「百済」の項；フリー百科事典〈ウイキペディア〉(2021 年 8 月 6 日閲覧)
(33)「特集　ヤポネシア― 47 都道府県人のゲノムが明かす　日本人の起源―」『日経サイエンス』，2021 年 8 月号（創刊 50 周年），pp. 30-43。

ヤポネシアゲノム

大陸部から海で隔てられた日本列島では，これまで列島内の人々を遺伝的に均一性が高い 1 つの集団とみる向きが多かった。しかし，現代人や古代人のゲノム解析が進めば進むほど，日本列島に暮らす人々は地域ごとに遺伝的な特徴が異なることがわかってきた。日本列島の集団が成立する上で大きなイベントとされてきた縄文人と渡来人の混血も，東アジアという広大な領域で起こった，数百年あるいは千年以上にわたる複雑な人類移動のほんの一部にすぎないようだ。

2018 年に始まったヤポネシアゲノムの研究プロジェクトを率いる国立遺伝学研究所教授の斎藤成也は，日本列島の人々のルーツを巡る大きな謎を「ゲノム解析と考古学，言語学など多数の分野の知見を組み合わせて解明したい」と意気込む。

ゲノム解析の登場で，研究の状況は大きく変わりつつある。「古代人のゲノムを高い精度で解析できるようになったことで，従来の考古学的な成果と互いに付き合わせた緻密な議論が可能になっている」と斎藤は研究プロジェクトの現在の状況を語る。ゲノム解析の手法を他の分野にも応用し，現代人ゲノムと各地の言語の系統関係を調べるユニークな研究も進行中だ。

日本列島の人々のルーツは，かつて歴史の授業で習った以上に複雑なものになりそうだ。しかしそれはきっと，今も昔も変わらない「活発な移動と交流」という人類の本質的な特徴の表れなのだろう。

……

人類史の側面から日本の歴史を眺めれば，最も重要な意味を持つのははるか昔の弥生時代だ。縄文時代の晩期から弥生時代にかけては，大陸から多くの人間が移住してきたことが知られている。ルーツの異なる縄文人と渡来人の混血が進み，現在の日本列島に暮らす集団の基礎ができた。この考え方は 1980 年代後半に人類学者の埴原和郎が「二重構造モデル」として提唱したもので，現在では日本人の起源に関する標準的な仮説となっている。

ただ，このモデルは日本列島を大雑把に中心部と周辺部の 2 つに分けて捉えたものだ。実際の日本列島は南西から北東まで 3000 km の長さを持つ広大な地域で，弥生時代に起こった出来事はもっと複雑な可能性がある。

それを予感させる研究成果が，2019 年に発表されている。国立科学博物館研究員の神澤秀明らによる，現代の日本人に含まれる縄文人由来のゲノム比率を調べた結果だ。北海道・礼文島の船泊遺跡で見つかった縄文人女性の骨から得たゲノムのデータを現代人のゲノムと比較したところ，日本各地の人々が受け継いでいる縄文人ゲノムの割合はバラバラたった。本州の人々は 1 ～ 2 割，沖縄の人々は 3 割，そして北海道のアイヌの人々はフ割の割合で縄文人ゲノムを受け継いでいた。

どうやら日本列島にはまだ，誰も知らない複雑な人類の歴史が隠されているようだ。それを解き明かすには，本州，琉球，アイヌの 3 つのヒト集団を研究対象にして，さらに日本の周辺にも目を向ける必要がある。現在，国立遺伝学研究所や国立科学博物館などが中心となって日本列島に暮らす人々の起源を探る「ヤポネシアゲノム」という研究プロジェクトが進行中だ。

ヤポネシアとはもともと奄美大島で長く暮らした作家・島尾敏雄が生み出した言葉で，ラテン語で日本を意味する「ヤポニア」を島々を意味する「ネシア」とつなげた造語だ。日本という国が生まれるより前にヤポネシアで繰り広げられた人類史のドラマが，少しずつ姿を現しつつある。

(34) 森　浩一（2011）『古代史おさらい帖―考古学・古代学課題ノート―』，ちくま学芸文庫，pp. 224-225。
(35) 関　晃（2011）『帰化人―古代の政治・経済・文化を語る―』，講談社学術文庫，p. 12。

ところで，中国や朝鮮半島から何十波にもなって人びとは日本列島に渡来し，何がしかの時をへると日本人に同化してしまった，このことは現代の日本人からもすんなりと認められている。ところが逆に，日本列島から中国や朝鮮半島に渡航しその地の人になってしまうという図式は認めたがらない傾向をぼくは感じる。短期間の旅や留学生としての滞在は認めるのだが，これはおかしな思考法である。ぼくはそのような意識も，先はどの「倭人字碑」の重要性をうけつけない人がいたことの潜在理由だと感じている。

もう一つ，当時の人々の海外交流については，『隋書』「東夷伝百済条」に注目すべき一文がある。「其大雑有新羅，高麗，倭等亦有中国人」とあって，六世紀ごろの百済には新羅人，高句麗人，倭人らが雑(まじ)って住んでいて，中国人もいたのである。この描写はおそらく百済の農村部のことではなく，海岸の港町の風景だったとぼくは推定している。

ここ二十年ほどの新しい成果として，朝鮮半島の西海岸南部の全羅南道で六世紀初頭前後の前方後円墳が十数基見つかっている。それらの古墳のなかには，墳

丘の裾に円筒埴輪に似た埴製品を立てたり，木製埴輪といわれる木製の立物を配した例も知られるようになってきた。

これらの前方後円墳の被葬者を一くくりにすることはむずかしいが，移住倭人とみるかそれともその地に交易の拠点をもった倭の商人とみるか，あるいは倭人を父に韓の女を母として生れた韓子（「継体紀」）の成長した姿とみるか，いずれにしても新しい視点が必要となった。

(36)『別冊・100 分で名著―「日本人」とは何者か？』，NHK 出版，2015 年。
(37) 山本　尚（2020）『日本人は論理的でなくていい』，産経新聞出版。
(38) 山本　尚（2020）『前掲書』，pp. 51-53。
(39) 酒井邦嘉（2008）『科学者という仕事―独創性はどのように生まれるか―』，中公新書，pp. 84-88。
(40) 岩見銀蔵：http://iwamigin.cocolog-nifty.com/blog/2015/10/post-148a.html（2021 年 7 月 12 日閲覧）

百済人と現在の朝鮮人とは違う

百済人とは，扶余族が王族で，民衆は漢人や倭人とされていた。当時の朝鮮半島には，漢人，扶余人，倭人，ツングース系ワイバク族が住んでいて，朝鮮人という括りは無かった。朝鮮半島にいた百済人とは，祖先を高麗から受け継ぐ現在の朝鮮人とは違った。白村江の戦いで百済滅亡後，数万人規模の百済人が日本へ亡命をした。

武蔵の国の百済人入植地記録には，

666 年（天智 5 年）……「百済人男女 2 千余人東国移住」
684 年（天武 13 年）……「百済人僧尼以下 23 人を武蔵國へ移す」
687 年（持統元年）……「高麗人 56 人を常陸國，新羅人 14 人を下野國へ移住」「高麗の僧侶を含む 22 人を武蔵國へ移住」
716 年（霊亀 2 年）……高麗郡の設置（駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野七カ国の高麗人 1779 人を武蔵國に移す）
733 年（天平 5 年）……「埼玉郡の新羅人徳師ら 53 人に金姓を与える」
758 年（天平宝字 2 年）……新羅郡の設置（日本に帰化した新羅の僧 32 人，尼 2 人，男 19 人，女 21 人を武蔵國に移住）
760 年（天平宝字 4 年）……「新羅人 131 人が武蔵の地へ移り住む」。崩壊した百済の支配層を受け容れるため，国の司を百済人と決め，日本各地の渡来人を東国の武蔵にまとめた記録だ。そして，朝鮮半島からの帰化人の由来，高麗が各地に残る。

高麗郡―武蔵国の郡。現在の埼玉県日高市高麗本郷。
高麗川―埼玉県内を流れる川。
高麗山―神奈川県にある山。一帯の県有林は，高麗山県民の森に指定されている。
高麗駅―西武鉄道の駅
高麗―神奈川県中郡大磯町の町丁。

現在，朝鮮半島にある百済のあった地域住人は，新羅の末裔とエベンキ族（ツングース系）だといわれる。そして，建国された高麗（コウライ）の読みが⇒ Korea コリアとなった。
（筆者注：武蔵國は，今の東京・埼玉あたりである）。

(41) 宮崎市定（2006）「中国商人気質」『中国文明論集』（礪波　護編），（本論文の初出は 1960 年），岩波文庫，pp. 353-358。

日本だったら，二日続けて通うほどの熱心さを見せたらたちまち向こうに馬鹿にされて，金輪際，値段の負がらぬ所である。そこは中国の商人は鷹揚にできている。それほど気に入った商品をお世話することができたら，商人として本望の至りだ。こんなに喜んでいただけるなら，出来ぬ所だが勉強してお負けします，というわけである。商人はサービス業だと自覚しているので，やはり一種の資本主義精神がちゃんと成立しているのである。商品を売るには顧客が大切である。顧客の確保は何べんも店へ来てもらうことである。だからたとえば茶の葉を買うにも，一度に多量に買う客よりも，何度も少量ずつ買いにくる客を大事にする。下宿のボーイに，毎日使うだけの少量の茶の葉の包みを買いにやった方が，一度にかためて買うより安い。これは決して近代資本主義の精神にはなりきっていないが，不合理の中の合理性が面白い。この話が間違って伝えられて，中国商人は日本からサイダーを輸入すると，元値を割ってサイダーを売るが，包装の木箱を売って儲けを取り返すくらいだから，日本の商人はとても太刀打ちできないなどと噂されたものだ。

(42) 石田梅巌著・足立栗園校訂（1999）「解題」（『都鄙問答』，岩波文庫，p. 135）。
(43) 友部謙一・西坂靖（2009）「労働の管理と勤労観―農家と商家―」『経営史・江戸の経験 1600～1882』（宮本又郎・粕谷誠編），第 3 章所収，pp. 112-133。
(44) Drucker, Peter F.（2008），*Management*, with

Joseph A. Maciariello, Harper Collins Publishers.
(45) Hicks, John R. (1969), *A Theory of Economic History*, Oxford University Press Paperback. (J. R. ヒックス著(新保博・渡辺文夫訳)(1995)『経済史の理論』,講談社学術文庫。)
(46) Bower, Joseph L., Herman B. Leonard and Lynn S. Paine (2011), *Capitalism at Risk: Rethinking the Role of Business*, Harvard Business Review Press, Massachusetts.(ジョセフ・バウアー=ハーマン・レオナード=リン・ペイン著(峯村利哉訳)(2013)『ハーバードが教える・10年後に生き残る会社,消える会社』,徳間書店。)
(47) 黒田重雄(2020)『マーケティング学の試み―独立した学問の構築を目指して―』,白桃書房,序(p. v)。